



特定非営利活動法人

アーシャ＝アジアの農民と歩む会

30号



ー農村にもっと
豊かな食事を

三浦 照男
アーシャ理事

食事は楽しく、生きているのを実感できる時間。おなか为空いたときに美味しい食事をし、家族と一緒に楽しい話をする。想像しただけでも「幸せ」な気分になります。しかし、インドの農村ではそのような食事ができていない人が多いようです。

先般、継続教育学部実習圃場で行われた農民のための稲作セミナーの後、皆と昼食しました。継続教育学部の食堂ホールでは十数名の農民が列をなし順番に各々が昼食を盛り付けていました。富士山のようにご飯を皿に載せ、その上から、溶岩が噴出したようにダル（豆）カレーをかける。皿からご飯もダルカレーもこぼれそうです。「2回に分けて食べたら！」と言いたくなるほどです。これでもかとはばかり、芋の炒めものを脇に乗せ、さらに、予めおわんに盛られたチキンカレーを嬉しそうに手に持って仲間と一緒に座って食べるのです。おかわりに挑戦している農民もいました。彼らは概して痩せ型。どこにこんなたくさんの食べものが入るのかと思うほどです。今まで研修に来ていた農民も同じ様でした。

農村住民や子ども達の食事に目をやると、昼間はそれぞれが好きなところで好きな時間に食べているようです。もっとも、薄暗い家の中で食べるよりは良いので

しょう。家の玄関近くで食べていることが多いようです。食事内容はきわめてシンプル。ご飯かチャパティ（種無しパン）に水っぽいダル汁又は単品の野菜カレーで食べるのです。何回見ても同じような光景です。溜息のような唸りが出ます。学部の食堂でみたように、山盛りにして食べている者をみたことはありません。家長であっても家族全員のことを考えると一杯食べられないのが現状ではないかと思えます。

インドの統計を見ても5人に一人の子どもは栄養不良です。実際、私たちが行っている乳児、幼児の体重測定記録でも9割程の子どもは平均以下の体重です。このような状況で「もっと豊かな食事を」と叫んでも何か空しさが残ります。

「先ず学部のスタッフのお腹を満たそう」と思いました。昨年度中盤から「スタッフランチクラブ」を作りました。月約350円の会費を払えば、昼食を学部の食堂で食べることができるというものです。想像どおり、比較的給与の安い者が弁当持参を止め、そのクラブに参加しました。昼食を一杯食べることができ、嬉しそうです。最初は前述の農民のような盛り方でしたが、徐々に大食いは減りました。そして、食堂のテーブルには、楽しそうな笑いが聞かれます。

人間は食べることに危機感があると「今、食べておかなくちゃ」という脅迫感で食べるのでしょうか。胃袋を満たすために食べる…それは決して楽しい食事をしているとは言えません。逆に、食べることに對して明日も「十分に食べられる」という安心感があると、自分の体調に合わせて、楽しく食べることができるようです。これは万国共通なことです。

私たちの継続教育学部やアーシャスマイルトラスト（インドNGO）のワーカーと共に、アジアの農村地域の持続可能な農業、収入向上、栄養保健、教育の向上事業を継続実施しています。それはたくさんの農村の人々が毎日、健康で、楽しく豊かな食事ができるようにと願うことです。そこに私たちの仕事の意義、目標があるように思えます。